

氏 名：	佐藤 美紀子
学 位 の 種 類：	博士（看護学）
学 位 記 番 号：	甲 第 6 号
学位授与年月日：	令和6年3月12日
学位授与の要件：	学位規則第4条第1項該当
論 文 題 目：	[和文]脳卒中後疲労セルフマネジメントプログラムの開発および初期疲労患者への実現可能性試験 [英文] Development of a Post-stroke Fatigue Self-Management Program and Feasibility Study With Early Fatigue Patients.
論文審査委員：	主査 姫野 稔子 副査 百田 武司 （主研究指導教員） 副査 鎌倉 やよい （第1副研究指導教員） 副査 原 玲子 副査 石崎 智子

博士学位審査結果の要旨

本研究は、脳卒中後の持続性疲労を回避するために、脳卒中後疲労セルフマネジメントプログラム（以下、プログラム）を開発し、初期疲労患者への実現可能性の検証および効果の検討を目的としている。脳卒中後疲労の発生要因は多様であること、介入及び効果発現のメカニズムは複雑であることから、研究計画の全体構成は英国医学研究審議会の「健康改善のための複雑介入の開発と評価における新たな Framework」に依拠して実施された。

【研究1】脳卒中後疲労の実態に関する文献レビューでは、脳卒中後疲労の発生要因と持続性疲労の転帰を明らかにし、脳卒中後早期における疲労改善の必要性を確認した。【研究2】脳卒中後疲労のセルフマネジメントの概念分析では、属性、先行要件、帰結で抽出した概念を整理し、「教育」「セルフモニタリング支援」「問題解決支援」の3つを介入プログラムの構成要素とし、研究1および2により研究枠組みを開発した。【研究3】脳卒中後疲労の実態に関する医療従事者調査では、脳卒中後疲労は重要かつ対処が必要な問題と医療従事者に認識され、疲労改善の個別支援が試みられているものの、その効果は十分に期待できない結果が示され、当該研究による介入の開発の必要性、および介入が臨床で受け入れられる可能性の示唆を得た。【研究4】脳卒中後疲労の実態に関する患者調査では、患者が一定割合で持続性疲労を有する実態と対処法が明らかとなり、プログラム開発の必要性、疲労改善に向けた対処法、それに介入の受け入れの可能性について示唆を得た。以上の研究結果から「介入がどのような条件下で、どのように効果をもたらすと予測されるか」を説明するプログラム・セオリーを開発し、プログラム・セオリーに基づいたプログラムの開発に至っている。プログラムは、脳卒中後疲労とセルフモニタリングに関する教育を提供するとともに、対象者が症状（疲労）、認知、行動のセルフモニタリングにより問題を特定し、1週間単位で実践可能な計画を選択・実施・評価するプロセスを支援するものである。プログラム・セオリーおよびプログラムの内容は、脳卒中専門医や老年看護専門看護師、摂食嚥

下障害看護認定看護師、脳卒中看護を専門とする看護師、脳卒中当事者へのコンサルテーションにおいて妥当性を確認している。開発したプログラムは、【研究5】初期疲労患者への実現可能性の検証を目的として準実験研究デザイン（少数サンプルサイズでの無作為化比較試験）による介入を行った。その結果、研究計画およびプロトコルに基づいた実施、研究対象者の受け入れに関して実現可能性が確認できた。一方で、発症後早期でのプログラム提供の必要性、脱落要因を考慮したプログラム期間の短縮、対象者の適格基準の変更、療養生活目標の明確化、目標と疲労改善との関連づけ、セルフマネジメントスキルの測定の必要性が課題として挙げられた。これらの結果からプログラムを改訂し、【研究6】において、再度、初期疲労患者への効果の検討を目的とし、準実験研究デザイン（1群プレテスト - ポストテスト）による介入を行った。その結果、介入前後において疲労は有意に改善し、意欲および知識を問う質問紙の正答率は有意に向上した。また、セルフモニタリングの実施率、疲労改善を目的とした計画の実施率、さらにプログラムの目標達成率も7割を超えており、疲労や意欲、知識の改善は本プログラムの効果であり、実証性において優れていると判断された。

脳卒中をはじめとした慢性疾患は、長期的な療養生活において症状が適切に管理されないことで、症状の悪循環をきたし、さらなる健康状態の悪化を招くことが指摘されている。脳卒中発症後に質の高い療養生活を送るためには、患者の「セルフマネジメント」の実践が求められる。本研究は、患者の脳卒中後疲労のセルフマネジメントスキルの獲得を支援し、疲労改善を果たすことを目的としたプログラムであり、持続性疲労による心身機能の低下やQOLの低下、ひいては死亡リスクを回避することが期待できるものである。

本研究は、国内外の文献レビューから研究の枠組みを作成し、当事者に対するニーズ調査や当事者に関わる医療従事者調査を実施することによりニーズや受け入れやすさを明らかにするなど段階的かつ体系的に設計され、遂行されている。また、結論に至るまで論理的一貫性が保たれており、現在確立されていない脳卒中後疲労に対する非薬物療法の科学的根拠の築に向けた基礎研究として学術的・社会的意義が高い。加えて、本研究は、既存の症状に対するモニタリング支援のみならず、認知・行動側面のモニタリングを含めた点や、入院中から介入を開始し、セルフマネジメントスキルを獲得して在宅療養に移行できる点において独創性と新規性を有し優れているといえる。

以上より、本論文は、適切かつ妥当な研究方法により、新たな知見が得られており、その内容は看護学の研究として独創性があり、社会的意義が認められたことから、博士（看護学）の学位論文として価値あるものとして認めた。また、研究プロセスや研究内容、研究成果の活用や発展、本課程における学修成果に関する試問を行った結果、研究者として自立して新規研究を立案・遂行する能力およびその基盤となる学力、専門領域の知識・技術など豊かな学識を有する等の能力を有していると判断し、博士論文審査および最終試験を合格と判定した。